

NCD 乳癌登録を用いた非浸潤性乳管癌に対する乳房温存術後の補助療法に影響する因子の検討

四元大輔（さがら病院宮崎 乳腺外科）

【目的】

非浸潤性乳管癌（DCIS）に対する乳房温存手術後の治療法として、放射線治療（RT）および内分泌療法（ET）が標準的な選択肢となっている。本研究では日本における DCIS に対する乳房温存手術後の補助療法の現状を調査した。

【方法】

2014 年から 2016 年に手術を受けて DCIS と診断され、乳房温存手術を受けた患者の関連データを日本乳がん登録データベースから入手した。臨床病理学的因子や施設因子、地域因子と、術後補助療法との関係を多変量解析を用いて検討した。

【結果】

DCIS に対して乳房温存手術を受けた、9516 人の乳癌患者を同定し検討を行った。全体として、23%が補助療法を受けず、71%が放射線療法のみ、32%が内分泌療法のみ、26%が放射線・内分泌併用療法を受けた。放射線療法施行割合は、若年者や高齢者で低く、日本乳癌学会の非認定施設でも低かった。内分泌療法施行割合は非認定施設で高く、手術切除の断端に癌を認めた(断端陽性)患者で高かった。併用療法は断端陽性の患者で高かった。

【結論】

今回の研究では、DCIS に対する乳房温存手術後の術後補助療法は、臨床病理学的因子、診断年、年齢によって異なるパターンが見られ、医師が患者の背景や DCIS の生物学的性質に応じた個別化治療を行っていることが示唆された。しかし、治療施設や地域によって DCIS の術後補助療法の選択が異なっている現状も示された。